

中国語返答表現に見る初級学習者のコミュニケーションストラテジー —諾否疑問文アンケート結果からの一考察—

谷 智子 (関西外国語大学) 趙 嵐 (関西外国語大学) 籠谷 香理 (関西外国語大学)

1. はじめに

昨今、言語教育において、単に文法を習得させるだけの教育から、学んだ事柄を如何にコミュニケーション実践に繋げていくかが検討されるようになってきた。中国語教育学会編纂の「中国語初級段階学習指導ガイドライン」についても、学習者が中国語らしさを体得し、ことばのルールを把握するためのガイドとなるよう体系的に作られている。

そこで本研究では、中国語初級学習者が、自然な中国語表現を習得していく上でどのようなコミュニケーションストラテジーを使用するのかについて、諾否疑問文を用いたアンケート結果を分析、比較、考察した。

2. 先行研究

まず、中田(2024)は中国語母語話者のコミュニケーション方法に関して分類している。中国語母語話者の諾否疑問文に対する返答方法として、応答形式をまず「直接応答」と「間接応答」の2つに分類し、中国語学習者は初級では「直接応答」から習得し、その後中上級では「間接応答」というように段階的に習得していく必要性を述べている。また、言語が接触する場面でのコミュニケーションにおける調整行動について、Giles et al. (1973)は相手によって話し方を調整する「アコモデーション理論」を提唱しており、相手に歩み寄る「言語的収束」、相手と距離をとる「言語的分岐」があると述べている。

言語学習に関する先行研究としては、オックスフォード(1994)が挙げられる。ここでは、「学習ストラテジー」が類型化されており、「記憶ストラテジー」、「社会ストラテジー」等が挙げられている。これを踏まえた中国語教育に関する先行研究としては、許挺傑(2018)が挙げられ、日本の中国語教科書では、「認知ストラテジー」の「繰り返す」と「記憶ストラテジー」の「イメージを使う」練習が多く見られたと述べており、また、アメリカの中国語教科書に多く見られた「社会的ストラテジー」と「認知ストラテジー」の「自然の状況の中で練習する」というのが日本の中国語教科書には非常に少ないということも述べている。

3. データ収集と分析

本研究では、中国語初級学習者の諾否疑問文に対する肯定返答表現を中国語母語話者のものと比較しデータ分析した。具体的な調査方法としては、約半年間を通して、中国語初級学習者計194名と中国語母語話者(中国の大学生)約70名を対象に、諾否疑問文に対して、「肯定」の返答表現で答えさせるアンケート調

査を行った。アンケートは計12問あり、質問が進むにつれ、副詞や助動詞などを足すなどして、文の成分を増やした。質問に対し、中国語初級学習者には選択肢の中から一つ選ばせ、中国語母語話者には選択肢はなく、自然な肯定での返答をお願いした。アンケートの回答形式が異なる理由としては、初級学習者が教科書を真似ただけの偏った答え方に集約するのを避けるためと、中国語母語話者に関しては、最も自然な返答表現を知りたいためである。また、回答者の心理を解明するためにインタビューを行った。¹

今回はページ数の関係で、一部のデータを割愛した。また、提示するのは、最多の割合と次点の割合の返答表現とした。

表1. 設問と返答結果

設問	中国語初級学習者の返答 (選択肢から選ぶ)	中国語母語話者の返答 (選択肢なし,自由回答)
(1) 你是学生吗? (あなたは学生ですか?)	我是学生. (44.9%) 是. (32.5%)	是. (62.5%) 是的. (11.1%)
(2) 北京热吗? (北京は暑いですか?)	北京很热. (46.4%) 很热. (43.8%)	热. (63.6%) 很热. (4.6%)
(3) 你想去吗? (あなたは行きたいですか?)	我想去. (50.0%) 想去. (27.8%)	想. (41.8%) 想去. (13.4%)
(4) 你坐地铁去吗? (あなたは地下鉄で行きますか?)	我坐地铁去. (58.2%) 坐. (17.5%)	是的. (15.0%) 对. (13.3%)
(5) 你也想去中国留学吗? (あなたも中国へ留学に行きたいですか?)	我也想去中国留学. (56.2%) 也想去. (24.2%)	想. (14.1%) 嗯. (11.0%)

設問(1)については、初級学習者の2番目に多い返答表現(“是” 32.5%)が中国語母語話者の自然な返答と同じになっているものの、最も割合が高い返答表現と設問(3)以降の返答表現の特徴は顕著で、例えば設問(5)のように、初級学習者は質問文の述語部分をそのまま使って返答していることが見て取れる。

これに関しては、中田 (2024)が、中国語母語話者の応答形式をまず「直接応答」と「間接応答」の2つに分類したうえで、さらに「直接応答」の中に「重複」という返答方法があることに触れている。上記表から初級学習者は質問文の述語部分をそのまま使う傾向が顕著で、この点が「重複」に当たるだろう。一方、中国語母語話者の返答も設問(4)以外は「重複」に当たると言えるが、初級学習者とは質が異なり、質問文の中核部分を的確に押さえて、ほぼその部分のみで簡潔に返答している。

また、この中国語母語話者の肯定返答から、中核部分は使わなくとも設問(4)のように相槌のような返答も見られた。これは中田(2024)の述べる「直接応答」の中の「応答詞」に当たる返答方式と言える。また、中田(2024)は中国語母語話者にとって「応答詞」は日常会話の中でよく使われる返答方法であると述べている。確かに、中田 (2024)の述べる「応答詞」は中国語母語話者にとって、日常的で自然な返答表現と言えるが、本研究のデータ結果から、中国語母語話者は“嗯”、“是的”などの「応答詞」の他に、質問文の核となる部分である「中核詞」を使って返答する傾向が見受けられた。「中核詞」とは文の鍵となる要素部分のことであると本研究では定義づける。例えば、設問(1)“你是学生吗?”の“是”や、設問(5)“你也想去中国留学吗?”の“想”などがそれに当たる。実際、中国語母語話者の自然な返答表現は、その質問の中核部分さえ相手に伝えれば、それのみでも返答表現となり得る。

¹ インタビューの詳細に関しては、発表または論文で提示する。

4. 考察

上記してきたように、中国語母語話者の相槌や頷きのような簡潔な返答が自然な表現として成立することがある。そういった返答表現は、中国語母語話者にとっては自然であっても、初級学習者はほぼ使えていないのが現状である。これについては、本研究における調査結果でも明らかとなっている。その原因としては、中国語母語話者の自然な返答表現は、初級中国語学習の中では、ほぼ習得の範囲外にあるからではないかと考えられる。²

ではここで、初級学習者と中国語母語話者の肯定返答表現の乖離について、初級学習者のコミュニケーションストラテジーという観点から更に考察してみたい。一つは、日本の中国語初級学習者は文法の語順に重きを置くあまり、安易に簡潔すぎる返答を避けているのではないか。このことは、ほぼ全ての設問で、多くの初級学習者が文の述語部分をそのまま使って返答としていることから窺えるのではないだろうか。人々は言語を学習する際に目標言語の話者の言語使用に近づけるように努力をする。アコモデーション理論(Giles et al. 1973)によると、言語学習、習得の文脈においては「言語的収束」が目標とされる。その収束方法の一つとして、第二言語学習者の視点に立った「コミュニケーションストラテジー」が挙げられる。これは、学習者が目標言語に近づき、コミュニケーションを成立させるためにとるストラテジーである。

本研究におけるデータでは、初級学習者は質問に対して、質問文の述語部分をそのまま使って返答する傾向が顕著であった。上記の分析で記したように、中国語母語話者の言語使用を見ると、この方法は中国語の返答表現として多少不自然かもしれないが、初級学習者がコミュニケーションを成立させるためにとった一つのストラテジーと言える。

上記のように、初級学習者が述語部分をそのまま使う「重複」返答を用いるのは、その質問における「中核詞」もしくは中国語の自然な「応答詞」が分からないからというのも原因として推測される。上記表の設問(1)(3)(5)において、中国語母語話者は質問文の「中核詞」に当たる“是。”“想。”“想。”で返答しているのに対し、初級学習者は質問文の述語部分をそのまま使って返答していることが見て取れる。この乖離は、初級学習者には、質問文の意味は分かるが、文の重点部分に当たる「中核詞」がどれか分からなかったり、中国語の「応答詞」が分からなかったりする中で、とりあえずコミュニケーションの成立を優先させ、無難に質問内容をそのまま使い「重複」するストラテジーを試みたと考えられる。

特に設問(4)(5)における初級学習者の返答は表現として冗長であり、不自然かもしれないことは彼らも認識できていると思われるが、まず、初級学習者として「意思疎通」を第一の目的としたことから、疑問文の表現をそのまま使用するというコミュニケーションストラテジーが取られたと言えよう。これは「アコモデーション理論」から見ると、初級学習者が取る最も単純な形の「言語的収束」と言える。

5. 終わりに

本研究は諾否疑問文に対する肯定返答表現に関して、中国語初級学習者と中国語母語話者の返答表現の乖離について考察してきた。

² 教科書調査については、本発表では割愛する。

結果, 中国語初級学習者のコミュニケーションストラテジーとして, 特に文に副詞や助動詞などの成分が付き, 文が長くなると, 質問文をそのまま使った「重複」返答をしやすい傾向にあった. 一方, 中国語母語話者は文が長くなるほど, 質問内容の鍵となる「中核詞」を即時に見出し, それを用いた簡潔な返答表現が目立った.

このように, 初級学習者と中国語母語話者の間では, 返答表現の特徴に差異がみられた. この要因の一つとして, 本研究では, 初級学習者は, 文の成分が増え, 長くなると相手の意図や質問文の重点要素である「中核詞」を見出すことが困難になるからではないかと予測する. 設問(4)や(5)のように, 初級学習者にとって文を構成する成分が複雑な質問文の「中核詞」を見出したりするには, どのような学習過程が必要なのだろうか.

許挺傑(2018)が述べるように, 「社会的ストラテジー」と「認知ストラテジー」の「自然の状況の中で練習する」というのが日本の中国語教科書には非常に少ない. よって, 初級レベルにおいても文法の語順に焦点を当てるだけでなく, 最初の段階から実際起こりうる現象に当てはめたコミュニケーションの練習を重ねていくことが肝要ではないかと思われる. より自然なコミュニケーションへつなげるために, 自然会話に近い文脈の中で「応答詞」を用いてみたり, 相手の意図や場面に応じて質問文の「中核詞」を見出して簡潔に答えていくなどの練習の必要性を今後検討していきたい.

参考文献

- Giles, H., Taylor, D. M., & Bourhis, R. (1973). Towards a theory of interpersonal accommodation through language: *Some Canadian data. Language in Society.* 2(2), 177-192.
- 中田聡美(2024). 论“吗”问句的应答方式: 兼谈汉语教学中的语用知识 外国語教育のフロンティア7, 1-9.
- オックスフォード, R. L. (1994). 言語学習ストラテジー 外国人教師が知っておかなければならないこと, 宍戸通庸・伴紀子訳 凡人社
- 中国語教育学会(2007). 中国語初級段階学習指導ガイドライン, 中国語教育学会
- 許挺傑(2018). 日本の初級中国語教科書における練習問題についての一考察—12冊の教科書調査を通して—筑波応用言語学研究, 第25巻, 19-32.